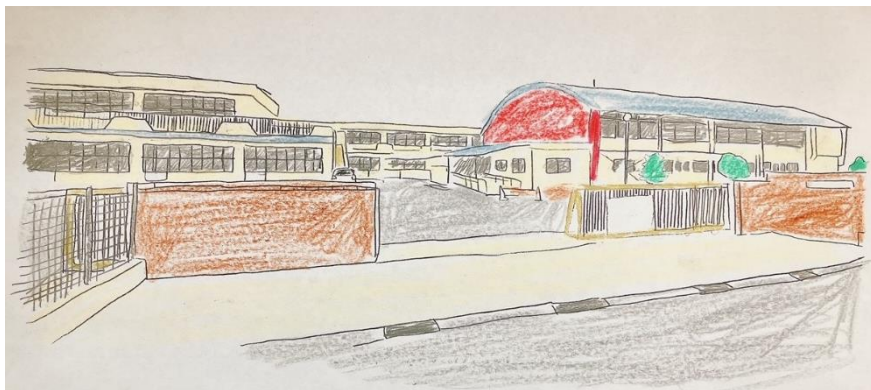
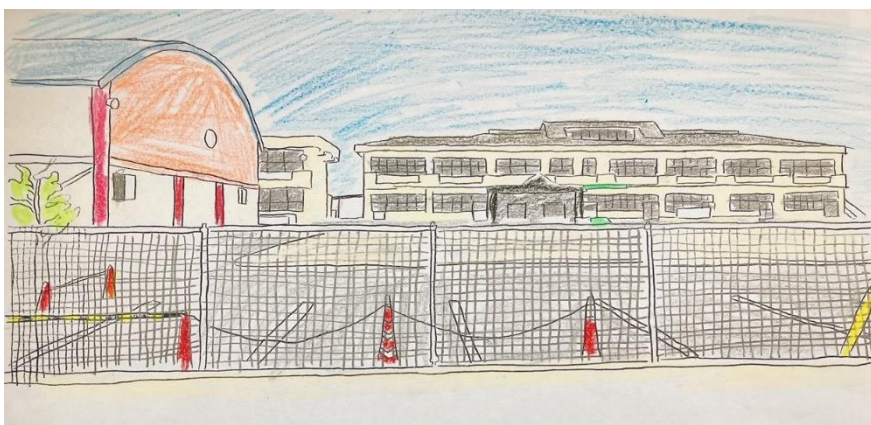


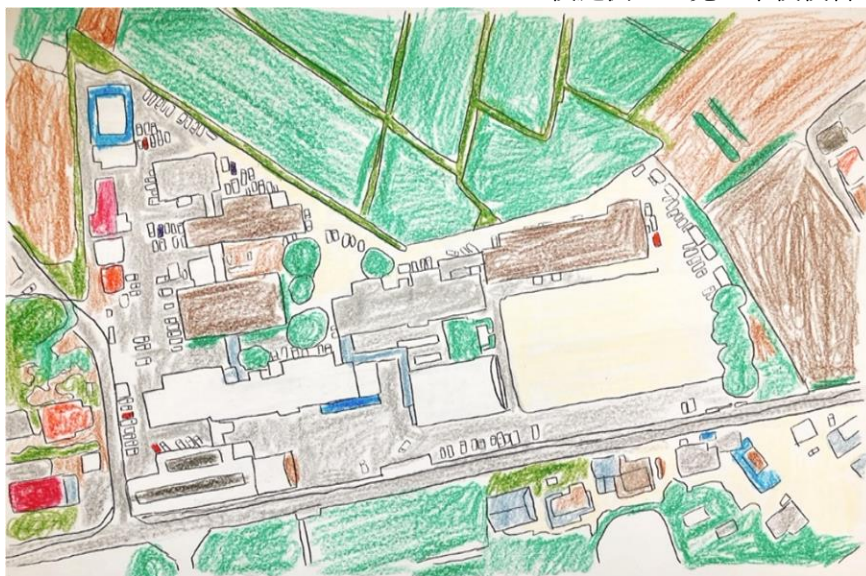
令和5年度 紀要〈36号〉 ほほえみ



正門から見た本校校舎



校庭側から見た本校校舎



本校の俯瞰図

栃木県立那須特別支援学校

教師が学びあう学校

校長 谷口 照子

本校の目指す学校像は「児童生徒がもてる力を高めて生き生きと活動できる学校」である。それを支えるための三つの視点として「地域から信頼されること」「保護者等が安心できること」「教師が学びあうこと」を示しているが、特に、三つ目の「教師が学びあうこと」は、私たち教師集団の基本的な姿勢として重要であると思う。その意味においても、校内研究を通して教師が日常的に学びあい磨きあうことは、本校の教育課程の充実・改善に生かすことだけでなく、一人一人の教師力やチーム力を高めることにもつながる取組である。

このたび、令和3年度から令和5年度までの3年間の研究成果をまとめた本校の研究紀要「ほほえみ第36号」を発刊する運びとなった。栃木県教育委員会では、令和2年度から6年間、県全体として特別支援学校の教育課程の改善・充実を目指して「栃木県特別支援学校教育課程研究」を設定し、三つの研究主題が示された。それは、A「自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方」B「各教科等を合わせた指導における、各教科の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための個に応じた効果的な指導と評価の在り方」C「社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を着実に育成するための個に応じた効果的な指導と評価の在り方」である。本校ではすべての学部で三つの研究主題に取り組めるよう、各研究グループに分かれて事例研究や授業改善などに計画的に取り組んできた。

振り返ると令和3年度はコロナ禍で、分散登校や短縮日課などがあり、授業実践の機会を考えると量的な面で不足していたことは否めない。しかし、逆に限られた時間の中で令和2年度の取組を引き継いでポイントを絞って研究を進めたことで、質的な面では十分成果が得られ、効果的な指導につながったように思う。さらに、その後の令和4年度から令和5年度にかけての2年間の研究ではそれまで他の研究グループで進めてきた研究方法を取り入れたり、得られた知見を生かしたりするなど、各研究グループで創意工夫を凝らして実践を進めることができたように思う。研究を進める上で、各グループの研究担当を中心に、研究主題の根幹となる考え方や実践のまとめ方など、定期的に情報共有を図りながら、協力して地道に実践を積み重ねてきている。どのグループも今後の課題が明確になり、指導計画の見直し等にも生かされるなど一定の成果が得られたように思う。これからも、すべての研究が子ども達に還元できるよう、本校の教育の充実のために継続して取組を進めていくことを期待している。

関係者の皆様には御高覧いただき、御指導・御助言を賜りたい。

目次

教師が学び合う学校

学校長 谷口 照子

I	Aグループ（高等部通常課程）	1
	自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方	
	サブテーマ 「はたらく意欲」の土台を育む指導実践	
II	Bグループ（小学部通常課程・重複課程）	5
	各教科等を合わせた指導における、各教科の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための 個に応じた効果的な指導と評価の在り方	
	サブテーマ 生活科(遊び・きまり)における個に応じた「集団学習」の取り組みについて	
III	Cグループ（中学部通常課程・重複課程、高等部重複課程、訪問教育学級）	8
	社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を着実に育成するための個に応じた効果的な指導と 評価の在り方	
	サブテーマ 自分から働き掛けたり働こうとしたりする意欲を育てるための授業実践	
	編集後記	11

I Aグループ（高等部通常課程）の研究テーマ

自立活動の指導における子どもの主体的な取組を促す効果的な指導と評価の在り方
～「はたらく意欲」の土台を育む指導実践～

1 はじめに

本校の高等部には、知的障害の他に、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害等の障害を併せ有する生徒が在籍している。

高等部では、テーマにある「はたらく」という言葉を、「仕事をする」、「働く」といった勤労観・職業観に基づくものであるとともに、「自らの力を発揮する」、「人の役に立つ」、「社会に参加する」、「人と関わる」などといった、社会で生きていくために必要となるものとして捉えている。

さて、本校では、栃木県特別支援学校教育課程研究集会において示された三つの研究主題を基にして研究に取り組んでいる。高等部では、令和三年度と四年度の二か年で、自立活動を研究主題として取り組んでいく。自立活動とは、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う」（特別支援学校学習指導要領 第7章第1）と示されている。さらに、具体的な内容の設定においては、「自立活動における学習の意味を将来の自立や社会参加に必要な資質・能力との関係において理解し、取り組めるような指導内容を取り上げること」（特別支援学校学習指導要領 第7章第3）とも示されている。「はたらく意欲」というテーマの下での取組を、さらに一歩進めていくために、一人一人の生徒に焦点を当てていくことを考えた。

昨年度の研究における成果としては、高等部段階の自立活動においては「心理的な安定」が大切な要素であることが分かった。どの事例においても、生徒が安心して取り組める状況作りを大切にしており、「やることが分かる（見通しをもつ）」、「できる状況を作る（学習環境を整える）」ことが有効な手立てとなった。さらに、集団の中で力が発揮できるように、個別の対応とともに、友達や教師との関わりを生かして指導を行っていた。課題としては、生徒自身が自らの課題と向き合うことが難しかったり、知的障害という困難性から「なぜ（課題に）取り組むことが必要なのか」という理解が難しかったり、目標設定によっては「できた」という達成感を得られにくかったりすることがあった。そのため、生徒の様子を踏まえた丁寧な対応の積み重ねが必要となることも見えてきた。

そこで、昨年度と同様にサブテーマを「はたらく意欲の土台を育む指導実践」と設定した。昨年度の成果と課題を基にして、「はたらく意欲」の土台を育むための自立活動の指導とは何かを、実践を通して検討していきたい。

2 目的

一人一人の「はたらく意欲」につながる土台を検討することを通して、自立活動における指導すべき課題と具体的な指導内容を明確に設定するなど、効果的な指導と評価の在り方について検討する。

3 方法

- (1) 指導と評価の在り方を含めた自立活動のPDCAサイクルを検討し、実践する。
- (2) 「はたらく意欲」につながる土台を育むための必要な手立てを、実践を通して検討する。

4 結果

(1) 指導と評価の在り方を含めた自立活動のPDCAサイクルについて

高等部における「はたらく意欲」に関する定義を、下記に示す。

「はたらく意欲」について（令和二年度の研究資料より抜粋）

「はたらく」とは、「仕事をする」、「働く」といった勤労観・職業観に基づくものであるとともに、「自らの力を発揮する」、「人の役に立つ」、「社会に参加する」、「人と関わる」などといった、社会で生きていくために必要となるもの。

「意欲」とは、「前向きな心の動き」、「やる気」、「動機付け」など。

上記のことを踏まえ、その土台を育むために必要となる自立活動について、特別支援学校教育課程編成の手引〔高等部〕（栃木県教育委員会、2020）に示されている「自立活動における指導目標・指導内容設定シート」を参考にし、実態把握から指導目標の設定、具体的な指導内容などを設定した。また、年三回実施する事例検討会において、事例の成果と課題を踏まえた検討会を行うことで、今後の実践の方向性を検討するというサイクルを設定した。

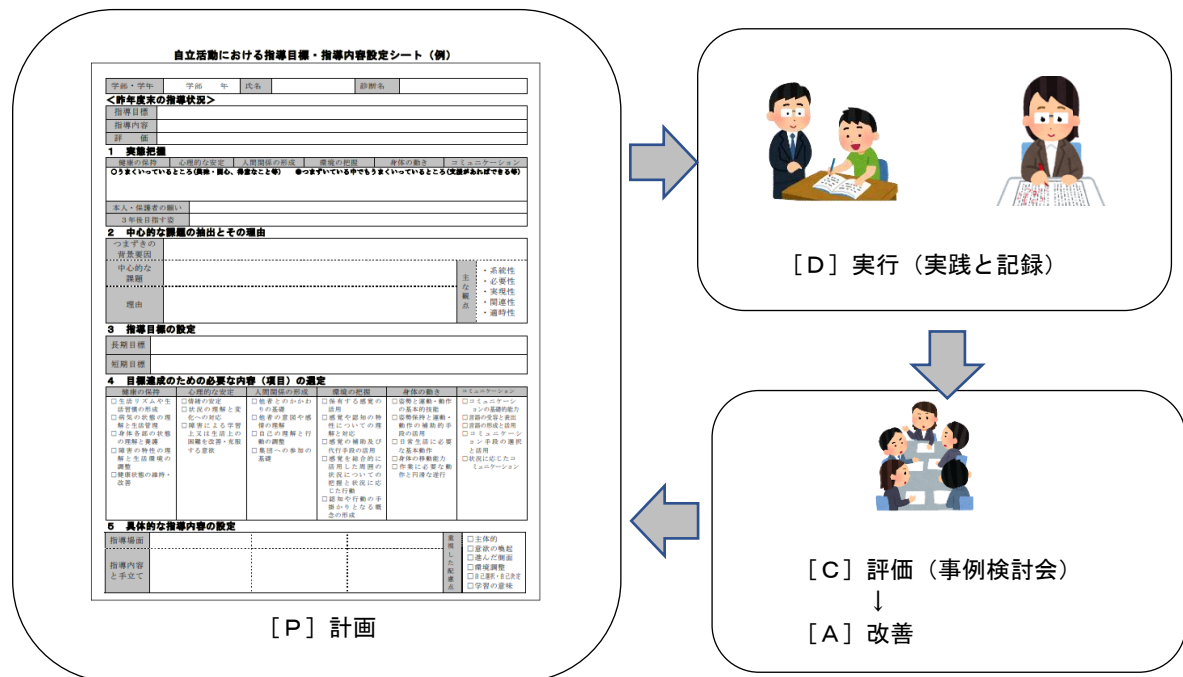


図1 自立活動のPDCAサイクル

(2) Aグループの実践

Aグループにおいては、表1に示した事例研究を行った。詳細については、実践報告を参照していただきたい。

表1 Aグループの事例研究

実践	対象学級			授業実践
1	高等部	通常課程1	2年	他者の気持ちに配慮した発言や行動をする能力の向上を目指した指導
2	高等部	通常課程2	3年	言葉でのやり取りを増やし、コミュニケーション能力の育成を目指す指導
3	高等部	通常課程3	1年	気持ちを切り替えて、活動に参加できるための指導
4	高等部	通常課程3	2年	時間を意識して、自ら考えて行動するための指導
5	高等部	通常課程3	3年	きまりへの意識を育むための指導

5 研究のまとめ

Aグループでは、「はたらく意欲」の土台を育むために、高等部通常課程において自立活動の実践を行ってきた。一人一人の生活がより豊かなものになるようにと願い、丁寧に実態把握をした上で、指導目標、そして具体的な指導内容を設定して取り組んだ。今年度の研究では五つの事例を取り上げたが、そこから見えてきた成果と課題についてまとめる。

(1) 今年度の研究の成果と課題

まず、五つの事例から見えてきた高等部の自立活動における特徴について述べる。自立活動の区分でいえば、「心理的な安定」、「人間関係の形成」、「コミュニケーション」を中心に指導内容が設定されていた。また、「主体的」、「環境調整」、「学習の意味」に配慮して、具体的に指導内容を検討していた。特に「学習の意味」に関しては、昨年度の課題にも挙げられていた「自らの課題を理解すること」、「その上で改善を図ろうとすること」と同様に、生徒自身が主体的に取り組むために必要な要素として検討されていた。

次に、研究の成果と課題である。今年度の五つの事例から見えたキーワードは、「意欲」、「信頼関係」、「安心感」、「好き・得意な活動を通して」、「自らの課題への気付き」、「分かりやすい手立て」であった。生徒が安心感をもち、自らの課題を意識して、少しずつ取り組むことの大切さが見えてきた。一方で、設定した目標の達成に近づいていくと、新たな課題が見えてくることも分かった。これから、生徒の実態、成長と課題などを見極めて、より妥当な目標を設定しながら実践を重ねていきたい。

(2) 二年研究のまとめ

最後に、二年間の研究を通して考えた生徒自身の主体的な取組を促すための手立てについて、実践を通して得た意見をまとめる。主体的な取組のために必要な要素を「安心感」、「自信や意欲」、「目的意識」の三つとし、二年間の研究の成果とする(表2)。

表2 主体的な取組を促すための手立て（二年間の研究のまとめ）

目的	手立て
安心感を高める	・身近な教師との関わり。関係性。 ・自分らしい振る舞い。集団の中での振る舞い方。 ・分かる状況作り。見通しがもてる状況作り。
自信や意欲を高める	・生徒の好き、得意、興味・関心を生かす。 ・できる状況作り（ヒント、実態に合わせた課題の設定など） ・実際に体験できる機会。 ・できたことや頑張ったことの振り返り。称賛。 ・振り返りの充実。 ・課題だけに目を向けず、取り組もうとした瞬間を逃さない。 ・小さな成功体験の積み重ね。
目的意識をもって取り組む	・生徒自身が目的を理解できる教材。 ・教師と生徒が目的を共有できる教材。 ・自身の特性を知る機会。良い点と課題点。 ・課題や改善方法を、明確に伝える。 ・自分で考えたり、判断したりする機会。 ・自分と他人との比較。 ・さらに良い案がないかどうか、生徒自身が考える機会。 ・生徒の状況（実態の変化）を見て、目的意識を判断。 ・卒業までを見通した取組。
その他	・一人一人の実態、ペースに合わせて。 ・授業だけでなく、学校生活全体での取組。 ・教師の待つ姿勢。応援する姿勢。指導と寄り添う支援のバランス。

Ⅱ Bグループ（小学部通常課程・重複課程）の研究テーマ

各教科等を合わせた指導における、各教科の基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させるための個に応じた効果的な指導と評価の在り方

～生活科（遊び・きまり）における、個に応じた集団学習の取組について～

1 はじめに

本校の小学部には、知的障害の他に、自閉スペクトラム症、注意欠陥多動性障害などの障害を併せ有する児童が在籍している。指示をよく聞き活動できる児童がいる一方で、集団活動の苦手さを背景とした経験不足や失敗経験などから、自信をもって行動する児童が少なかったり、集団学習に抵抗を感じやすい児童がいたりする。

さて、本校では、栃木県特別支援学校教育課程研究集会において示された三つの研究主題を基にして研究に取り組んでいる。小学部では、令和三年度と四年度の二か年で、各教科等を合わせた指導における効果的な指導と評価の在り方を、研究主題に据えて取り組んでいく。特に、各教科の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得、集団場面における個に応じた指導と評価の在り方に焦点を当てていく。

昨年度の研究では、生活科の「遊び」や「きまり」の基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指して実践を行った。成果としては、①児童一人一人が主体的に動ける活動内容を検討し、系統性を踏まえた「きまり」を意識して授業実践ができたこと、②年間指導計画の目標や学習内容を見直して、学習内容を系統立てることができたこと、が挙げられた。さらに、「やってみたい」という思いを育むためには、児童の興味のあるものを生かした取組も、知識・技能の確実な習得のためには必要になると考えた。課題としては、①児童の実態と、段階別に設定した学習内容がうまく合致しない場合の対応、②児童一人一人が、自分の力を使ってうまく遊ぶことのできる状況を準備すること、などが挙げられた。

それらを踏まえ、二年次のサブテーマについては、昨年度と同様に「生活科（遊び・きまり）における、個に応じた集団学習の取組みについて」と設定した。昨年度の成果と課題を基にして、さらなる授業改善を進めていく。昨年度の実践を踏まえて作成した年間指導計画と学習内容一覧表（表1）を参考にしながら、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指していきたい。

表1 小学部における「遊び」と「きまり」を踏まえた学習内容一覧表

学年等	遊びの内容	ねらい（きまりを含む）
重複障害学級 課程1	・ 感触遊び （水、ボール、ネット、鈴ひもなど） ・ 光遊び （ディスコライト、イルミネーションなど）	・ さまざまな物に触れたり、感触や感覚を味わったりする。 ・ 教師や友達と一緒に活動する。
重複障害学級 課程2	・ 感覚遊び （パラシュートやボールなど親しみのある教材） ・ かくれんぼ遊び （好きな物を使って、教師や友達と）	・ 感覚に関することや興味のある物、人の幅を広げる。 ・ 教師や友達と一緒に活動する。
通常学級 1、2年	・ 乗り物遊び （電車・バスなど） ・ 釣りや宝探し遊び （好きな物を使って）	・ 教師や友達と一緒に活動する。 ・ 順番を守る（座って待つ）。 ・ タイマーが鳴ったら終わる（片付けや交換）。
通常学級 3、4年	・ 道具を使った遊び （ボールを運ぶ、カードをひっくり返す、フープなど） ・ まねっこ遊び （身体表現など）	・ （教師や）友達と活動をする。 ・ ゲームのルールを守る。 ・ 簡単な役割を決める。
通常学級 5、6年	・ 道具を使った遊び （ボール落とし、協力して運ぶ、カードめくり、釣り、パズルの組み合わせなど）	・ 友達と協力して活動する。 ・ ルールを考えたり決めたりする。 ・ 役割を分担する。

2 目的

効果的な指導と評価の在り方を実践するためのPDCAサイクルを検討し、それを基にして各教科の基礎的・基本的な知識・技能を、個に応じた確実に習得していくための指導の手立てを検討する。

3 方法

- (1) 指導と評価の在り方を含めた授業作りのPDCAサイクルを検討し、実践する。
- (2) 生活科、特に「遊び」や「きまり」の内容を含めた合わせた指導において、知識及び技能を確実に習得していくために必要な手立てを実践を通して検討する。

4 結果

(1) 指導と評価のPDCAサイクルについて

生活科の目標は、「自立し生活を豊かにしていくための資質・能力」と改められ、児童が生活に必要な基本的な知識や技能及び態度を、生活経験を積み重ねて着実に身に付けていくことが基本にあり、更に自らの生活を豊かにしていこうとする資質・能力とすることを明確にした。

内容としては、中学部との内容のつながりを踏まえ、基本的生活習慣、生活や家庭、社会や理科に関するものとして整理された。更に、生活科においては、自ら考えて、判断し、表現等をしていく中で、知識や技能を身に付けていくことを重視し、(ア) 思考力、判断力、表現力等、(イ) 知識及び技能の柱から示している。

本研究における基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得においても、生活科の特徴を踏まえながら、指導を計画していく。また、年二回実施する授業検討会において、授業の成果と課題を踏まえた検討会を行うことで、今後の実践の方向性を検討するというサイクルを設定した。振り返りに際しては、本校の「主体的・対話的で深い学び」の研究で用いた振り返りシートを、一部修正して活用することとした。

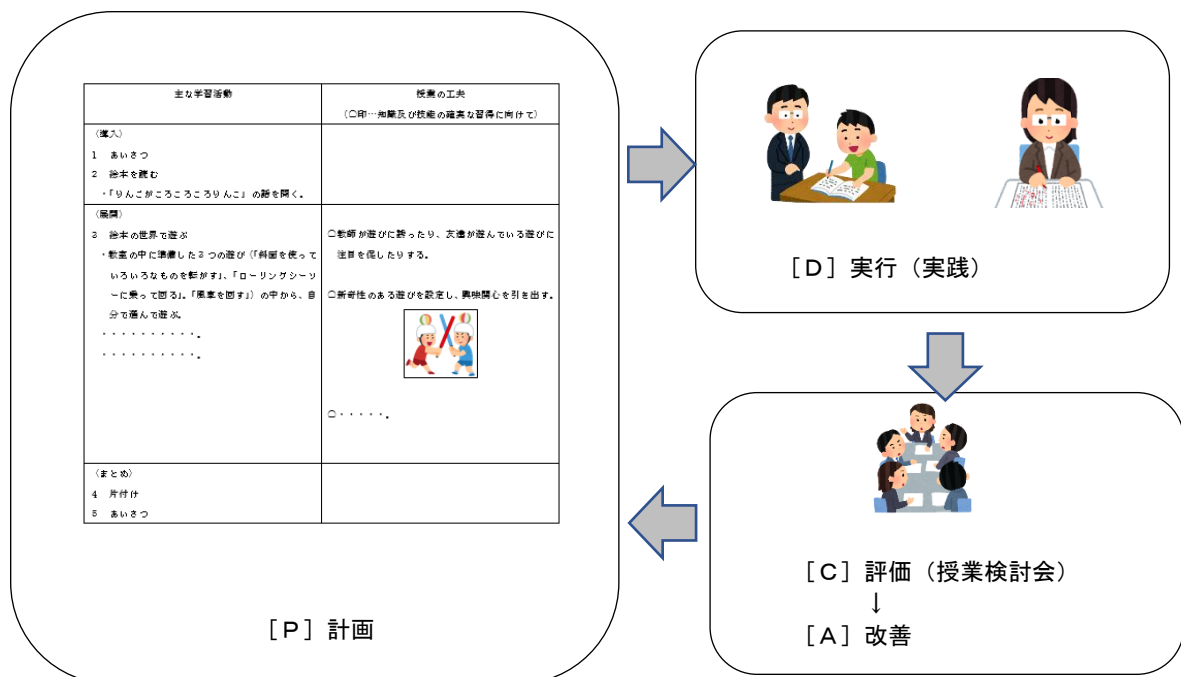


図1 授業作りのPDCAサイクル

(2) Bグループの実践

Bグループにおいては、表2に示した授業実践を行った。詳細については、実践報告を参照していただきたい。

表2 Bグループの授業実践

実践	対象学級			学習の形態	授業実践
1	小学部	通常学級	1年	生活単元学習	カードめくりをしよう
2		〃	4年	〃	箱運びリレーをしよう
3		〃	6年	〃	缶積みゲームをしよう
4	小学部	重複障害学級	課程1	〃	音楽遊び

5 研究のまとめ

今年度は、昨年度の実践を踏まえて作成した年間指導計画や学習内容一覧表を参考にして、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を目指した授業実践を行った。

また、研究グループをブロック（二学年など）で設定することで、より系統性を意識した授業内容の検討と改善に向けた話し合いを行うことを目指した。

(1) 今年度の研究の成果と課題

年間指導計画や学習内容一覧表を参考に学習内容を設定することで、系統性を踏まえながら各学年等の実態に応じた授業実践を行うことができた。例として、友達との関わりに関する実践の違いを挙げる。重複障害学級や低学年では、教材を通して相手の存在に気づき、教師を介してやり取りすることで、友達を意識する姿が見られた。中学年では、チームなどを組む中で、同じチームの友達を意識しながら活動する姿が見られた。高学年では、役割分担や児童同士の話し合いなどを学習内容として設定することで、友達と協力したり主体的に関わろうとしたりする姿が見られた。実態を踏まえながらも、生活年齢を考慮して系統立てた授業実践が行われていた。一方で、昨年度の課題として、児童の実態と段階別に設定した学習内容がうまく合致しない場合があった。しかし、今年度の実践では、同じ遊びやゲームであっても、実態に応じてルールなどを工夫することで、児童一人一人が楽しく生き生きと遊ぶことができていた。

「きまり」については、一回の実践ではなかなか理解や定着が難しいのは課題であったものの、繰り返し行うことで少しずつ意識していく様子が見られた。

(2) 二年研究のまとめ

昨年度からの二年間の授業実践を通して、児童の実態や系統性を踏まえながら、生活科（遊び・きまり）における基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得について検討をしてきた。知識・技能の確実な習得を促すためには、「繰り返し」や「継続」が効果的であることが分かった。単発ではなく、一定期間同じ枠組みの「遊び」や「きまり」を基にした学習内容を設定し、その活動を繰り返すことが有効な手立てとなりうるということが、実践を通して明らかになった。

本研究は一応の区切りを迎えるものの、研究で得られた成果と課題を生かして、今後も継続して取り組んでいきたい。そして、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得のあり方をさらに考え、よりよい授業実践を目指していきたい。

Ⅲ Cグループ（中学部通常課程・重複課程、高等部重複課程、訪問教育学級）の研究テーマ

社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を着実に育成するための個に応じた効果的な指導と評価の在り方
～自分から働き掛けたり働こうとしたりする意欲を育てるための授業実践～

1 はじめに

本研究グループは、中学部の通常学級と重複障害学級、高等部の重複障害学級、さらに訪問教育学級と、多様な実態を有したグループである。そのため、研究の大枠は同じであるものの、それぞれの実態に応じた社会的・職業的自立を検討し、それに必要となる資質・能力を着実に育成することを目指していくこととする。

さて、本校では、栃木県特別支援学校教育課程研究集会において示された三つの研究主題を基にして研究に取り組んでいる。本研究グループでは、令和三年度と四年度の二か年で、社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を育成するための効果的な指導と評価の在り方を、研究主題に据えて取り組んでいく。特に、各学習集団の実態に応じた社会的・職業的自立に関する具体的な検討、そして個に応じて資質・能力を育てていくための指導と評価の在り方に焦点を当てていく。

昨年度の研究では、中学部通常学級と、重複障害学級（中・高）、訪問教育学級に分けて実践を行った。中学部通常学級では「職業・家庭」の授業において、「自分から働こうとする意欲を育てる」ための授業実践を行った。家事や手伝いなどの実践的な学習を通して、現時点で生徒が身に付けているそれらの知識や技能を知ることができた一方で、「座学よりも体験的な学習をより多く取り入れられるとよかった」、「学校での学習が家庭で生かされているかを把握することが難しかった」という課題が挙げられた。重複障害学級（中・高）、訪問教育学級では、「自分から働きかけようとする意欲を育てる」ための授業実践を行った。児童生徒の実態に応じて、五感を使った活動や集団での活動を通して、意欲を育むことができたことから、二年次においてもさらなる授業改善を図っていくことを確認した。

サブテーマについては、昨年度と同様に「自分から働き掛けたり働こうとしたりする意欲を育てるための授業実践」と設定した。昨年度の成果と課題を基に、さらなる授業改善を進めていく。中学部通常学級では、主体的に役割や課題を果たすことで充実感や達成感を得るという、主体的な体験の積み重ねを通して、自分から働こうとする意欲を育てていきたい。

一方、重複障害学級（中・高）や訪問教育学級では、五感に働き掛けたり、周囲との双方向的なやり取りを重ねたりする中で、自発的な表出などの働き掛けようとする意欲を大切にしていきたい。

2 目的

効果的な指導と評価の在り方を実践するためのPDCAサイクルを検討し、それを基にして社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を着実に育成するための指導の手立てを検討する。

3 方法

- (1) 指導と評価の在り方を含めた授業作りのPDCAサイクルを検討し、実践する。
- (2) 自分から働き掛ける意欲に焦点をおき、社会的・職業的自立に向けて必要となる資質・能力を育成するために必要な手立てを、実践を通して検討する。

4 結果

(1) 指導と評価のPDCAサイクルについて

本研究においては、自分から働き掛けたり、働こうとしたりする意欲に焦点をおき、一人一人に応じた職業的・社会的自立に向けて必要となる資質・能力について検討しながら、指導を計画していく。また、年三回実施する授業検討会において、授業の成果と課題を踏まえた検討会を行うことで、今後の実践の方向性を検討するというサイクルを設定した。振り返りに際しては、本校の「主体的・対話的で深い学び」の研究で用いた振り返りシートを、一部修正して活用することとした。

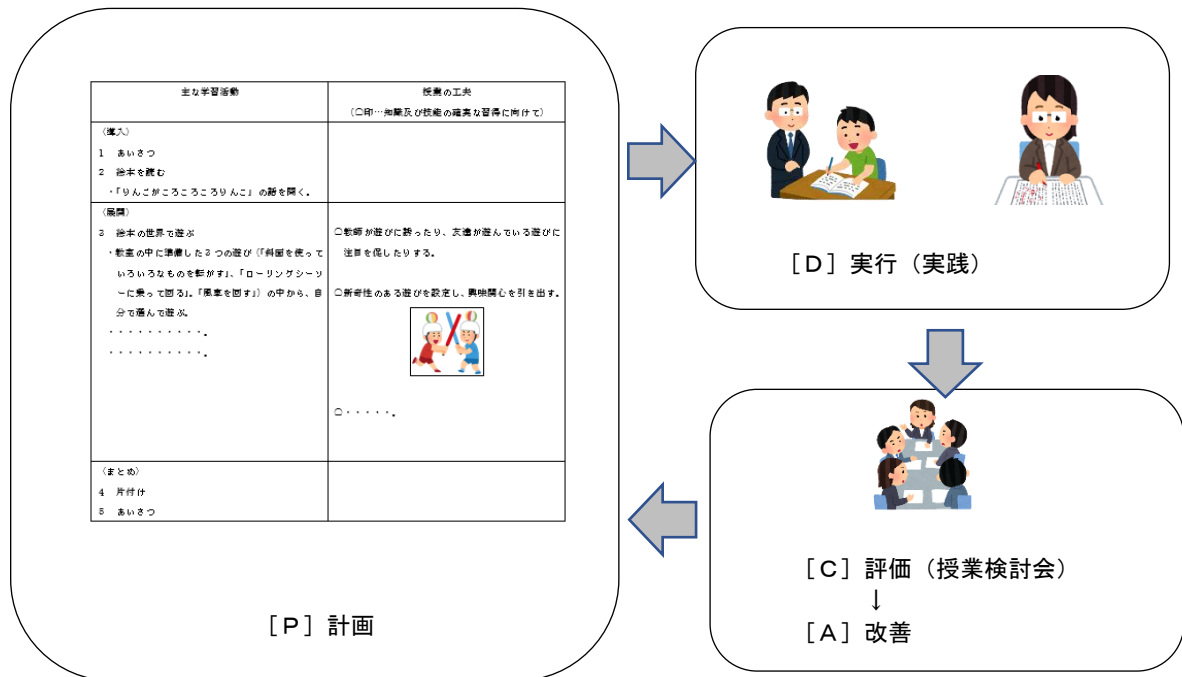


図1 授業作りのPDCAサイクル

(2) Cグループの実践

Cグループにおいては、表1と2に示した授業実践を行った。詳細については、実践報告を参照していただきたい。

表1 Cグループ（中学部通常学級）「働こうとする意欲」を育む授業実践

実 践	対象学級	学習の形態	授業実践
1	中学部 通常学級 1年	職業・家庭	家族の役割
2	〃 2年	〃	校内実習事後学習～できたこと、これから がんばることを考えよう～
3	〃 3年	〃	仕事をして給料をもらおう

表2 Cグループ（重複障害学級、訪問教育学級）「働き掛ける意欲」を育む授業実践

実践	対象学級	学習の形態	授業実践
4	中学部 重複障害学級 課程1	生活単元学習	風遊びをしよう
5	高等部 重複障害学級 課程2	日常生活の指導	朝の会
6	訪問教育学級	生活単元学習	七夕会をしよう

5 研究のまとめ

（1）今年度の研究の成果と課題

中学部通常学級では「職業・家庭」の授業において、「自分から働こうとする意欲を育てる」ための授業実践を行った。昨年度の課題を踏まえ、体験的な学習を取り入れるとともに、家庭との連携を図る内容を取り入れた。成果としては、実生活の中で目にする機会や経験したことのあることを授業の中で行うことで、生徒が自信をもって主体的に取り組むことができた。さらに、自分のことができることが、人の役に立つということに気付く様子が見られた。また、「データ入力の仕事をして給料をもらう」という仕組みを取り入れることも、働く意欲を高めるために有効な手立てとなった。

今後も、キャリア教育の視点を取り入れながら、生徒が働くことへの具体的なイメージをもちつつ、課題を意識して学習に取り組むための支援の方向を検討していきたい。

一方、重複障害学級（中学部、高等部）、訪問教育学級では、「自分から働きかけようとする意欲を育てる」ための授業実践を行った。児童生徒の障害や授業の形態が多様であるため、それぞれの実態に応じた形で授業を実践した。

中学部重複障害学級の実践では、好きな風の刺激を通して、注目や意思の表出などの意欲を引き出すことができた。

高等部重複障害学級の実践では、ふだんから継続的に取り組んでいる朝の会を通して、見通しをもって主体的に参加しようとしたり、自発的に友達と関わろうとしたりする様子が見られた。

訪問教育学級では、七夕を題材に、体験的な活動場面を設定する中で、興味のある物を取ろうと手を伸ばしたり、友達と関わろうとしたりする様子が見られた。

三つの実践からは、「好きな物の活用」、「見通し」、「体験的な活動」などのキーワードが大切になることが明らかになった。

（3）二年研究のまとめ

それぞれの学習集団に応じた授業実践を積み重ねることによって、児童生徒の「働く意欲」や「働き掛ける意欲」の向上につなげることができた。そのためには、教材に対する関心や面白さなどを、どのように引き出していくかが大切になり。さらに検討していく必要があることも感じた。

本研究は一応の区切りを迎えるものの、研究で得られた成果と課題を生かして、今後も継続して取り組んでいきたい。

編 集 後 記

ここに、研究紀要「ほほえみ」36号を発行することができました。今号は令和3年度から令和5年度までの3年間に、各研究グループに分かれて取り組んだ成果を掲載いたしました。それぞれが研究を通し、よりよい指導内容、指導方法の在り方を模索してまいりました。皆様に御高覧いただき、御指導いただければ幸いです。

今後もさらに充実した指導に向け、全職員で取り組んでいきたいと考えております。

研究紀要 ほほえみ(36号)
令和6年3月22日 発行
発行者 栃木県立那須特別支援学校
校長 谷口 照子

〒329-2712
栃木県那須塩原市下永田8-7
TEL 0287-36-4570
FAX 0287-37-5488
Eメール nasutoku@tochigi-edu.ed.jp

表紙の絵：高等部3年 室井 翔